

「50年後の国づくりに向けて」——50年前を顧みて

(株)東京鐵骨橋梁・技術顧問 正会員 ○ 阿部英彦

1. はじめに

50年先には私は勿論、生きていないが、既に亡くなった多くの先人達から我われ自身もお陰を多く受けているので、我われも無責任であってはならず、後世に対し恥じとにならない様、有形無形の遺産を残す義務がある。50年先を論ずる前に、まず今から50年前、即ち、1955年頃を振り返って見て現況とどの様に異なっていたか考えてみたい。そこに50年後の国づくりのヒントが見つかるかも知れない。

2. 50年前を顧みて

当時、私は大学を卒業して国鉄に入社し約1年の実習期間を経て、いよいよ設計部門で実務を始めたところであり、我が人生でも重要な節目の一つであった。私が関係して来た鋼橋界に関しては西海橋や城ヶ島大橋など当時としては大型の近代橋が建設された。そして間もなく東海道新幹線や名神高速道路の建設が始まり、その後は各新幹線や高速道路が次々と建設され、青函トンネルや本州四国連絡橋など世界的にも前例を見ない規模の土木構造物が完成して行った。それから陰りが始まり、現今の状況に至った。

内容的にも環境配慮、電子計算機利用、情報管理と進化して来たが、この様な移ろいを内容やその時期を含めて、50年前にどの程度予測可能であったろうか？ 勿論、部分的に予測が当たった事柄もあるが、それは膨大な予測例の一部に過ぎない。一般的にはそれまでの傾向を外挿法により予測し、また、かなり楽観的な予測が多かったと思う。一般的に外れた予想は忘れてしまう。

そこで標題の「50年後の国づくりに向けて」であるが、これは予測と言うより「50年後を見据えて、今どの様に準備すべきであるか？」との課題であると解釈する。勿論、ポジティブに考え、より良い国づくりをする事が目的であるが、日本の情勢は世界の情勢の変化により複雑に影響されるので、良くも悪くも難しい問題である。やたらに背伸びしても意味がなく、また、絶対的な良薬などもない。他国の情勢をも慎重に視野に入れる事は重要であるが、一方、大胆性を織り交ぜて早期決断する事も必要であろう。今までは待つ余り、後手に回って不利を招いた例が少なくない。将来の国づくりを考えるにしても世界的な趨勢を踏まえつつ、より良い国づくりを始める事になるので、以下、幾つかの項目に分けて概略考えることにする。

3. 国勢について（経済年齢）

幸い日本の領土は海に囲まれているし、平和が国是であるから、余程の戦争にでも巻き込まれない限り、領土的には現在と余り変わらないと考えて良からう。ただし、北方領土の4島や領海などには多少の変化はあり得る。しかし日本の人口、年齢構成、人種構成などは現在とは相当変わるので、その事実を踏まえて将来に備えざるを得ない。日本の人口は2006年をピークとして減り始め、2010年には65才以上が4人に1人、2025年には3人に1人になると予測されるので、高齢者も働かざるを得ない。よく言えば成熟社会、悪く言えば活気に欠ける社会になる可能性もある。また、人口過剰の国からの知的技能者や労働者の採用、流入は避けられないであろう。国づくりに対してもこれらの趨勢を積極的に利用すべきである。その点で同族気分、以心伝心などとは行かなくなり、よりドライな契約社会的になって来る。

ところで高齢化については、現在も医学的長命化と社会保障とのアンバランスが目立ちだしたが、保障が個人的、社会的に破綻する日は遠くない。即ち、医学が発達しても個人的にも社会的にも實際上、その長命を支える事ができなくなるので、いずれは均衡して平均寿命は今より多少低下して落ち着くであろう。

日本の経済は当然、他国の状況に深く影響され、世界の経済を日本が主導すると言うわけには行かない。

キーワード：国勢、人口構成、食料問題、教育問題、グローバル化、土木技術と技術者

連絡先：〒108-0023 東京都港区芝浦 4-18-32 （電話）03-3451-1145 （FAX）5232-3336

勿論、一頃の好景気の再来は望めない。一人勝ちの様な状態とは程遠く、関係各国と共存共栄、ギブアンドテイクの精神で地道な努力を続けなければならない。ODRなどは苦しくても大きく引き受ける必要がある

4. 土木構造物

一般に土木構造物は長持ちするから、50年位のレンジで見れば、現在を含めて日本の景気が良かった時代に建造した構造物は殆ど残っており、供用され続けるであろう。機能上や目的変更が原因で使われなくなる物や廃棄される物は少ないと考えられる。逆に言うと新規に建造される物は少なく、巨大プロジェクトなどは殆ど望む事が出来ない。既設の物を補修、補強して大切に使う事になり、新規とメンテの予算配分も現在とは大いに異なって来るであろう。材料の発達や他分野のテクノロジーの進歩に合わせて、相当合理的な構造物、建設方法に脱皮すると考えられる。例えば空港についても50年の中には航空機の発達により、今の様な広い飛行場や海上空港を必要としなくなる可能性が大きい。

5. 食料の自給

人間生活で最後に必要な物は水と食料である。日本は良い水には恵まれているが、食料の自給率については先進諸国中、異常に低い値である。食料の輸入も平和時には能率が良い様に見えるが、一旦緩急の場合、外国からの食糧輸入は期待できない。また、肥料も少なければ、収穫が減少する事を考慮しなければならない。これは重大な事であり、その施策は今から考えておくべきである。

6. 都市への集中化

人口が減少する事を考えると能率と経済性などの観点から都市に集中する傾向は避けられない。また、環境技術の発達により都市集中化の弊害は余り心配するには及ばないと思われるが、地震などの災害に対して強い物にして置く必要がある。更に情報、通信システムのバックアップ態勢を安全な遠隔地に確保しておく事も重要である。前記の様に高齢化にも限度が来る。自動車の需要もやがて頭打ちとなり、交通の整備も質、量共に需要に追いついて来る。但し、インフラのメンテナンスには手が掛かる様にはなるであろう。

大深度構造物などの技術を進めるのは良いが、もはや余り需要がないかも知れない。但し、いざの場合に備えてシェルターは必要であるかも知れない。日本の活動は、やはり、東京～神戸あたりの帯が中心にならざるを得ないと思われるので、この帯に対しては道路、鉄道共、必要に応じて強化を要するであろう。

7. 教育の問題、土木技術者の多面化

明治の頃、日本の工学は、まだ余り細分化されておらず、日本工学会が中心となり、発展初期にあったため今の土木技術者が中心になっていた観があった。しかし種々の工学が発達するにつれて機械、電気、化学と言う風に学会も順次、独立して行った。そして最後に土木工学グループが残る形になったので、土木工学は雑多で範囲も広いと言う印象がある。敢えて共通点を言えば、やはり社会のインフラの整備という事になるが、50年後には少なくとも現在の業種における土木技術者の需要は減ると考えざるを得ない。今の土木工学の守備範囲はハードからソフトに大きく移り、また、他の工学分野、いや人文の分野も同様に変わって行くので、他分野との相互乗り入れがもっと盛んになる。余り土木技術としてのアイデンティティーにこだわる必要はない。土木工学者の活躍範囲は広くなると解釈するのが良いが、そのためには大学の教育も今からそれを充分、視野に入れて置かなければならない。

8. 海外に発展

特に土木技術者は平和裡に海外に発展する事が内外に対しても最も好ましい事である。そのためにはODAなどの政府ベースに参加したり、NPO、NGOなど民間ベースに属して大いに海外の援助活動を行う事が出来る。とにかく、今後の土木技術者はグローバルな視野を持つ事が絶対に必要である。日本の土木技術者は現在より遥かにグローバル的に活躍場所を求める事になろう。ヨーロッパ諸国などは早くからその様な状態であり、将来、日本も彼等との競合が激しくなるので、これに乗り遅れず、勝たなければならない。